論　文

「祇王・Guiuŏ」を巡って

大東文化大学名誉教授　市井外喜子

A Study of "Guiuŏ"

Tokiko ICHII

要旨　古典平家物語では巻第一に位置する「祇王」章段が、天草版平家物語では巻第二冒頭に「祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち，親子三人尼になり，世を厭うたことと，またその仏も尼になったこと．（以降、Guiuŏ 章段とする）」として位置している。この古典平家物語から天草版平家物語への「祇王」→"Guiuŏ"位置の大移行は、編者不干ハビヤンの意図によるものと考えられる。天草版平家物語巻第一・巻第二の構成からその意図を探り、"Guiuŏ"章段の位置を吟味した。

1. はじめに

古典平家物語巻第一「祇王」章段と、天草版平家物語"Guiuŏ"章段の収載位置が異なりを見せていることについて、これまでに報告をした主なものは、次のものである。

天草版平家物語 Guiuŏ の章段　『日本文学研究』第 38 号　1999 年

『天草版平家物語私考』　新典社　2000 年

「jenchixiqi（善知識）」考　『大東文化大学紀要　人文科学』第 50 号　2012 年

今回は、これまでの報告の上に更に（go）mufon, ama ni naru（ʃama uo cayeru）を key word として吟味し、編者不干ハビヤンの意図を探りたい。

（「ぎわう」の表記に異なりが見られる。煩瑣を避けるために、高野本「祇王」の表記を用いることにする。）

『天草版平家物語』は、原本名を「日本のことばと Hiſtoria を習い知らんと欲する人のために世話にやわらげたる平家の物語（FEIQE NO MONOGATARI）」とするものである。1592 年＝元禄元年、イエズス会天草学林において印刷され、翌年に刊行された。それは聞き手兼進行役をつとめる右馬の允（VM.）と、話し手の喜一検校（QI.）が「両人相対して雑談をなすがごとく」にとの編纂目標にしたがって、「検校の坊，平家の由来が聞きたいほどに，あらあら略してを語りあれ」と右馬の允が請い、喜一が「やすいことでござる：をうかた語りまらしょうず」と受けて、平家物語の大

略を、当時の話し言葉によって語る（対話形式）のを、ポルトガル式のローマ字綴りで記したものである。これがキリスト教布教のために来日した当時のイエズス会宣教師のための日本文化・日本語学習のテキストである。

なお天草版平家は、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（江口正弘著　明治書院）を使用した。

2. 天草版平家物語：巻第一・巻第二の構成

天草版平家物語巻第二冒頭に位置する“Guiuŏ”章段を吟味するために、巻第一・巻第二の構成内容を明らかにする。

2-1　巻第一・巻第二の構成内容

最初に巻第一の構成内容を見ると、次のようになる。

巻第一（第一章段～第十二章段）は、古典平家高野本を代表としてみると、巻第一～巻第三までの内容を取捨選択してとりこんだものである。内容にしたがって構成をみると、3区分に分割することができる。なお各区分における主要な題目を記しておく。

第1区分（第一章段のみ）

清盛の先祖歴代の大要を語り、忠盛昇殿から、清盛をはじめとする平家一門の威勢繁栄を語る。

題目第一　平家の先祖の系図，また忠盛の上のほまれと，清盛の威勢栄華のこと．

第2区分（第二章段のみ）

摂政基房の車ともめ事を起こした清盛の孫、資盛をめぐる平家悪行の始めを語る。

題目第二　重盛の次男関白殿え狼藉をなされたこと：これ平家に対しての謀反の根源となったこと．

第3区分（第三章段～第十二章段までの10章段）

巻第一の主題目である「鹿谷」事件を語る。（藤原成親等による平家打倒の策が失敗し、その顛末・後日譚まで）

題目第三　成親卿位あらそいゆえに，平家に対して謀叛を企てられたことが顕れ，その身をはじめ，くみしたほどのもの搦め取られ，そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと．

第十二　有王鬼界が島に渡って，俊寛に会い：俊寛死去せらるれば荼毗をして，その遺骨をくびにかけ，都え帰り上り，方々修行して，その後世をとむらうたこと．

次に巻第二の構成内容を見ると、次のようになる。

巻第二（第一章段～第十章段）は、古典平家巻第四・巻第五の内容を取捨選択してとりこんだものである。但し、第一章段を除く。内容にしたがって構成をみると、3区分に分割することができる。なお各区分における主要な題目を記しておく。

第1区分（第一章段のみ）

不干ハビヤンの意図的な配置によって、古典平家巻第一「祇王」章段が、天草版平家巻第二冒

頭に置かれている。清盛の「fuxiguina coto のみをせられてござる」とする結果を語る。

題目第一　祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち，親子三人尼になり，世を厭うたことと，またその仏も尼になったこと．

第２区分（第二章段～第八章段までの７章段）

「高倉宮以仁王」の事件を語る。（高倉宮以仁王が、源三位頼政にすすめられて企てた平家打倒の顚末・後日譚まで）

題目第二　高倉の宮の御謀叛あらわれて，三井寺え落ちさせられたこと．また長兵衛とゆう宮の侍あとに残って合戦をし，生け捕られたこと．

第三　三位入道の嫡子仲綱馬ゆえに面目を失われたによって，この恥をすすがうずるとて，謀叛ををこされたこと：ならびに競が宗盛をたばかって主の恥をすすいだこと．

第３区分（第九章段・第十章段の２章段）

「源頼朝の挙兵」を語る。（頼朝の挙兵から、終始源氏方に圧倒される平氏のこと）

題目第九　文学のすすめによって頼朝の謀叛ををこさせられたこと．平家わまたこれを平げうとて，討手をくだされたこと．）

2-2　巻第一第３区分の吟味

“Guiuŏ” 章段（巻第二第一章段）の前に置かれているのが、巻第一第３区分の「鹿谷」事件である。

ここでは平家物語で最初に語られる大事件である「鹿谷」事件を吟味する。

題目第三　成親卿位あらそいゆえに，平家に対して mufon を企てられたことが顕れ，その身をはじめ，くみしたほどのもの搦め取られ，そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと．のもとに、右馬の允（VM.）と喜一検校（QI.）の対話形式により語られるのは、次のものである。

VM.　さて平家の悪行わかからぬことぢゃの？

QI.　そのことでござる：平家の悪行わこればかりでもござない．そのうえ無理な位あらそいをして，あまたの人々をこえて次男宗盛右大将とゆう官にあがられた．さうあったところで，成親卿と申す人これを無念に思うて，なんとぞして平家を亡ぼいて本望を遂げうずると企てられた．

（成親は望む官位を得られないことを不満に思い、平家に対して mufon を計画する。後白河法皇までが鹿谷に参集した。多田蔵人行綱が清盛に密告し、mufon は露顕してしまう。参集した者は捕えられ、それぞれに刑罰を受けた。）

題目中に用いられた “mufon：謀叛” を追っていくと、「鹿谷」事件の主題の全体像をつかむことが出来る。順を追って出現する第３区分の mufon を見る。第３区分には 18 例の mufon が出てくる。

第３区分の mufon

1. 成親卿位あらそいゆえに，平家に対して mofon を企てられたことが顕れ，
2. （成親卿）外人もないところに兵具をととのえ，武士を語らいをいて mufon の営みのほかには他事なかった

3. （鹿谷に）その夜の酒宴にこの mufon のことををうせあわされてあったれば，
4. その mufon にくみしたものわあまたあったなかにまづ俊寛，康頼，西光または行綱などとゆうものでござった．
5. やがて勢をもそろえて mufon を企てられうずることであったれども
6. 催しばかりでこの mufon かないそうにも見えなんだところで，
7. 行綱この mufon にくみすることわ，無益ぢゃと，思う心がついて，
8. （清盛→貞能）当家を傾けうとする mufon のものどもが京中に満ち満ちたぞ
9. 清盛安穏にあらうかとゆうて，やがて mufon の翌を搦めとれと，下知せられたれば，
10. さうするところに，この mufon にくみしたほどのものをことごとく搦めとってまいってござる．
11. あまっさえこの一門を亡さうずるとの mufon にくみしたやつぢゃ．
12. もしこの mufon 遂げられたならば：御辺とてもをだしゅうやあらうと申せと，言われたれば
13. 清盛言われたわ：成親の卿が mufon わことの数でもない．
14. 当家の運命いまだ尽きぬによって，mufon もすでにあらわれてござる．
15. 清盛の mufon の心も柔らかうずるかとの謀と，聞こえた．
16. われに mufon をたくんだ者であれば，俊寛をば思いもよらぬことぢゃと，言われた．
17. 御辺の父，大納言殿のよしない mufon のゆえぢゃ．
18. （追捕の官人が参って）身内の人々をも搦め捕って，gomufon の次第を尋ねてみな失い果たいてござる．

このように無謀な平家打倒の企ては、成親の平家に対する私憤に起因している。成親の mufon に対して平家物語は次のように、批判している。

なんとぞして平家を亡ぼいて本望を遂げうずると企てられた．これを思えば，いらぬことであった．親の卿にまさってこの成親卿わ大きな国をもあまた持たれ，また子息所従ともに朝恩にほこり，なんの不足もなかったに，このやうな心のついたことわひとえに天魔の所為と見えた．

2-3　巻第二第２区分の吟味

“Guiuŏ” 章段（巻第二第一章段）の前に置かれている巻第一第３区分：「鹿谷」事件（mufon）を、mufon を key word として見てきた。ここでは “Guiuŏ” 章段の後に続く「高倉宮以仁王」の事件（mufon）第２区分（第二章段～第八章段までの７章段）を吟味する。

第２区分において「高倉宮以仁王」の事件の原因が語られるのは、題目第二ではなく、第三においてである。

題目第三　三位入道の嫡子仲綱馬ゆえに面目を失われたによって，この恥をすすがうずるとて，mufon ををこされたこと：ならびに競が宗盛をたばかって主の恥をすすいだこと．のもとに、VM. と QI. の対話は次のように進められる。

VM. 三位入道の mufon の由来をもを語りあれ.

QI. かしこまった. さても年来日ごろもあればこそあつたに：三位入道ことし何たる心がついて mufon をばをこされたぞと言うに, 宗盛 fuxiguina coto をせられたゆえぢゃ.

(源頼政の息子仲綱が愛馬の「木の下」を宗盛に強引に奪われ、屈辱的な仕打ち（「仲綱」と焼き印を押し、やれ仲綱め引き出せ、仲綱を打て、はれなど）を受け、宗盛の傍若無人の振舞い：fuxiguina coto に、頼政は mufon を決意した。この mufon は早々に露顕してしまい、悲劇的な結末となる。(高倉宮は流れ矢にあたって死ぬ。頼政・仲綱は自害など)

題目に用いられる“mufon”を追い、「高倉宮以仁王」の事件を見る。順を追って出現する第 2 区分の mufon は、10 例である。

第 2 区分の（go）mufon

1. 高倉の宮の gomufon あらわれて, 三井寺え落ちさせせられたこと.
2. 右馬. 高倉の宮の gomufon の様体をも聞きたい, を語りあれ.
3. 喜. 高倉の宮の gomufon の由を披露つかまつったれば,
4. 宮の gomufon すでにあらわれさせせられたによって,
5. 君の gomufon すでに顕われさせせられたによって,
6. 高倉の宮わ gomufon ををこさせせられて, 失せさせせられたとゆうほどこそあれ,
7. (仲綱) 馬ゆえに面目を失われたによって, この恥をすすがうずるとて, mufon ををこされたこと
8. 右馬. 三位入道の mufon の由来をもを語りあれ.
9. 喜. 三位入道ことし何たる心がついて mufon をばをこされたぞと言うに,
10. 宮の gomufon ををこさせせられて失せさせせられたと, 聞こえたれば,

頼政の「なましいに私にわくわたてられず, 宮をすすめまいらせ」た平家打倒の企ては、平家に対する私憤に起因している。この mufon に対して平家物語は、次のように評している。

頼政わ伊豆の国を下されて, 子息の仲綱わ受領せられ, わが身わ丹波の五箇の庄, 若狭の東宮河を知行してさてあらうずる人がよしないことを思いくわたてて, わが身も子孫も亡びられたことわ, まことにあさましい次第でござった.

3. 巻第二第 1 区分“Guiuŏ”章段の吟味

これまで“Guiuŏ”章段の前後に注目し、巻第一第 3 区分および巻第二第 2 区分の mufon を key word として吟味してきた。

これからは巻第二第 1 区分に位置する“Guiuŏ”章段を見ることにする。

3-1 「祇王・Guiuŏ」章段の位置

巻第二第1区分“Guiuŏ”章段を見る前に古典平家物語巻第一「祇王」章段について見ておきたい。

まず最初に「祇王」章段の位置を、次の『平家物語』七本によって、確かめることにする。

1　屋代本　『屋代本高野本対照平家物語』新典社

2　国会本　新潮日本古典集成『平家物語』新潮社

3　斯道文庫本　『百二十句本平家物語』汲古書院

4　小城本　『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院

5　高野本　新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店

6　葉子十行本　日本古典全書『平家物語』朝日新聞社

7　流布本　『平家物語』おうふう

古典平家の「祇王」章段の収載状態を、明らかにする。収蔵位置が諸本により異なりを見せている。

○屋代本　目次には巻一清盛出家事→白拍子義王仏等事但有別紙→二代之后立事近衛院二条院

本文は巻十二の後に、「平家抜書一巻之内義王義女仏閉事同出家事」として、収載されている。

○国会本　巻第一第四句額打論→第五句義王→第六句義王出家→第七句殿下乗合

○斯道文庫本　巻第一第二句参内上禄→第三句義王→第四句義王出家→第五句二代之后

○小城本　巻第一清盛出家事→白拍子義王佛等事→二代近衛院二条院后立事

○高野本　巻第一吾身栄花→祇王→二代后

○葉子十行本　巻第一清水炎上→妓王→殿下騎合

○流布本　巻第一我身の栄花→妓王→二代の后

（「祇王」章段の位置、「ぎわう」の表記に異なりが見られる。国会本・斯道文庫本においては、「祇王」章段が2章段に分かれているのが注目される。）

天草版平家は、古典平家「祇王」章段の位置を大きく移行させている。高野本の目次にあわせてその様子を示す。

○巻第三有王・僧都死去＝「鹿谷」事件：天草版平家巻第一第十二（最終章段）有王鬼界が島に渡って，俊寛に会い：俊寛死去せらるれば荼毗をして，その遺骨をくびにかけ，都え帰り上り，方々修行して，その後世をとむらうたこと．→○巻第一祇王＝巻第二第一（冒頭章段）祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち，親子三人尼になり，世を厭うたことと，またその仏も尼になったこと．→○巻第四鼬之沙汰・信連・競＝「高倉宮以仁王」の事件：巻第二第二高倉の宮の御謀叛あらわれて，三井寺え落ちさせられたこと，また長兵衛とゆう宮の侍あとに残って合戦をし，生け捕られたこと．

上記のように天草版平家の「Guiuŏ」章段は、大移行を示しているが、このような大きな変化を見せるものは、他の章段では見られない。

さて「Guiuŏ」章段の位置については種々の論が見られるが、最初に三氏の論述を揚げる。

山田孝雄『平家物語考』（勉誠社）には、次のように見られる。

記載事項の配列の次第につきての異同を考ふべし。

先、祇王祇女の事の位置なり。これは二代后の上におく本あり、殿下乗合の上におく本あり。源平盛衰記には第17巻福原遷都の辺に置き、長門本には全く之を載することなし。然るにこの本は上の諸本とはまた違いて高倉宮御謀叛の上に置けり。これらの事平家物語編次の研究上には大切なる参考事項なり。

また土井忠生『吉利支丹文献考』（三省堂）には、次のようにある。

天草版の第一巻が俊寛のことで終り、第二巻の初めに祇王の話が置かれている点は問題となる。これは恐らく、祇王の話は平家物語の本筋に関係がうすいので一応省いたものの、有名な話でもあり、清盛の傍若無人な振舞を示す適例でもあるから、あらためて第二巻を編むにあたって、その最初に入れたものであろう。底本に用いた本がこのような順序になっていたのではあるまい。その第一巻の底本となった文語本は第二巻以下のとは同じくない。

さらに小島幸枝『キリシタン文献の国語学的研究』（武蔵野書院）には、以下のような記述がある。

土井博士御指摘のように序説相当の第一巻は、一方流のものに依り、本題とする第二巻以降は百二十句本系の本文に従っている。原平家物語と校合すると、祇王祇女の話だけが順不同で、ヘイケの巻二冒頭に置かれている。これは、第一巻を序説ないし本紀相当にあてたとみれば、第二巻以降の列伝に拘わると考えての移動と考えられるであろう。もちろん、依拠本によるものであり、ハビアン個人の作為ではあるまい。

ここでGuiuŏ章段の原拠本についての二氏の論述を見ておきたい。

土井忠生『近古の国語』（「国語科学講座」31明治書院）

天草本平家物語四巻は、禅坊主落ちのイルマン不干ハビヤンの口訳に係り、灌頂巻を別に立てない系統の百二十句本に依ってゐるが、たゞ第一巻及び第二巻最初の一章「祇王清盛に愛せられた事」等は、私の照合した百二十句本（京都府立図書館蔵）とは一致しないで、別系統の流布本の本文に近い。流布本の何れと一致するかは未だ確かめてゐない。

清瀬良一『天草版平家物語の基礎的研究』（渓水社）に、天草版平家と古典平家との依拠本を整理した表が載せられている。必要箇所を示しておく。

古典の平家物語		天草版平家物語	
原拠本に近い本	巻	巻	章
覚一本（龍谷大学本）	一	I	1・2・3
	二		3、4～9
	三		10～12
	一	II	1（妓王の話）
百二十句本（慶応本）	四		2～8
	五		9～10

上記のそれぞれの考察は、『天草版平家物語』の成立過程を考える上で、重要な指摘である。

ここで改めて天草版平家「Guiuŏ」章段の位置を吟味するために、鎌田廣夫『天草本平家物語の語法の研究』（おうふう）の論述に注目したい。次のようにある。

「天草本」編者の意識が専ら頼政謀叛に傾き、謀叛の由来を宗盛の悪行にしぼって祇王の話と結びつけようとした意図を、編者の原典に対するかうした態度からも察知することができる。「天草本」祇王の話と頼政謀叛との並べ方は全く無関係だとは思はれないのである。

この引用文にあるように、不干ハビヤンの意図的な配置によって「Guiuŏ」章段は、巻第二冒頭に置かれたものと思われる。巻第二の構成全体の中で考察を行うべきである。

“Guiuŏ”章段には、清盛の「世間の謗をもはばからず，人の嘲りをもかえりみいで，fuxiguina cotoのみをせられてござる」とあり、「高倉宮以仁王」事件には、頼政が「さても年来日ごろもあればこそあったに：三位入道ことし何たる心がついて謀叛をばをこされたぞと言うに，宗盛fuxiguina cotoをせられたゆえぢゃ」とあり、各々の結末を語る章段である。したがって鎌田廣夫氏の「『天草本』祇王の話と頼政謀叛との並べ方は全く無関係だとは思はれないのである」とされるのは、卓見と言える。

清盛に対する私憤から出家して尼となる祇王、また宗盛に対する私憤から高倉宮以仁王に対して「なましいに私には企られず、宮をすすめ参らせ」て謀叛を企てた頼政。この清盛・宗盛親子の「fuxiguina coto」が、平家衰亡の前兆となることを語るのが、巻第二冒頭章段（祇王）であり、第二章段から第八章段に及ぶ7章段（高倉宮以仁王の事件）である。

3-2 “Guiuŏ”章段の吟味

改めて巻第一「祇王」章段を吟味することにしたい。古典平家物語「祇王」の内容を、『平家物語大事典』（東京書籍）より転写することにしたい。必要・充分な内容が含まれている。

「祇王は平清盛の寵愛を受け、母・妹ともに白拍子仲間からうらやまれる富貴の身となる。姉妹にあやかって名前に「祇」文字を使う白拍子も多かった。ある日、若い仏御前という白拍子が清盛の館に推参し、舞を披露する。①清盛は祇王から仏御前に心を移し、祇王は館を追い出され傷心の日々を送るが、②再び清盛館に呼び出される。それは仏御前の無聊を慰めるためであり、扱いも一段低かった。③絶望した祇王は出家、母とぢ・妹祇女もともに出家し、嵯峨野に隠栖する。ある夜、④仏御前が庵を訪ね、祇王の運命がいつかは自分に及ぶと思い、髪を切ってきたという。祇王は驚くが仏御前を受け入れ、四人一緒に念仏の生活を送り、やがて四人ともに浄土往生の素懐を遂げた。後白河院の長講堂の過去帳に「祇王・祇女・ほとけ・とぢらが尊霊と四人一所に入られたという。」

下線部①・②は、清盛のfuxiguina cotoの例を示す。

波線部③は、祇王の絶望からの逃避的、消極的な出家を、

波線部④は、仏御前の自らの意志による積極的な出家を示す。

次に天草版平家物語“Guiuŏ”章段（巻第二冒頭章段）を見ることにする。

題目第一　祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち，親子三人尼になり，世を厭うたことと，またその仏も尼になったこと．のもとに右馬の允（VM.）と喜一検校（QI.）の対話形式により語られるのは、次のものである。

VM. さて誠に誰にも，かれにも清盛わ難儀をかけた人ぢゃの？またその祇王がことをも聞きたい，を語りあれ．

QI. 長いことなれども，申さうず．清盛わこのやうに天下を掌に握られたによって，世間の謗をもはばからず，人の嘲りをもかえりみいで，fuxiguina coto のみをせられてござる．

題目に用いられる“ama ni naru：尼になる”を追っていくと、“Guiuŏ”の主題が明らかになる。巻第一第3区分および巻第二第1区分の ama ni naru の出現状況を示したい。

巻第一第3区分の ama ni naru：2例

1. 成親の最後のこと：その北の方都にて ama ni nari かの後世をとむらわれたこと，
2. （俊寛の娘）やがて ama ni natte，奈良の法華寺とゆう寺に行ないすまいて，父母の後世をとむらわれと，申す．

巻第二第1区分の ama ni naru：6例

1. 親子三人 ama ni nari，世を厭うたこと．
2. またその仏も ama ni natta こと．
3. 祇王わ二十一で ama ni nari，嵯峨の奥な山里に柴の庵をひき結んで，念仏申していた．
4. その時 ama domo 肝を消して，あわれこれわ言うかいないわれらが念仏しているを妨げうとて，魔縁のきたるでこそあるらう
5. （仏）かづいた衣をうちのけたを見れば ama ni natte きた．
6. （祇王）我らが ama ni natta ことを世にありがたいことのやうに人も言い，わが身にも思うたが，

ama ni naru と、つながりのある ʃama uo cayeru をも見ることにする。

巻第一第3区分の ʃama uo cayeru：2例

1. （成親卿の北の方）今一度変らぬ姿を見もし，見ようとてこそ今日まで ʃama uo caye なんだれ，今わ何にしょうずると言うて，
2. 菩提院とゆう寺え入って，ʃama uo caye，かたのごとくとむらいなどをして，後世をとむらわれた．

巻第二第1区分の ʃama uo cayeru：6例

1. （妹の祇女）十九で ʃama uo cayete，姉と一所に籠って後生を願うたわ，
2. （母のとぢ）若い娘どもさえも ʃama uo cayuru 世の中に，
3. （仏→祇王）かやうに ʃama uo cayete 一所にとうけたまわった後わ，
4. このやうに ʃama uo cayete 参ったれば，日ごろの科をば，許させられい
5. （祇王→仏）このやうに ʃama uo cayete をぢゃったれば，日ごろの恨みわ露，塵ほども残らぬ．
6. これわ身を恨み，世を恨みてのことなれば，ʃama uo cayuru もことわりぢゃ．

なお xucqe が（祇王→仏）に1例見られる。

○今そなたの xucqe に比ぶれば，ことのかずでもない．

前出の（go）mufon をも加えて吟味することにしたい。

（go）mufon、ama ni naru、∫ama uo cayeru、xucqe の出現度数をまとめて表にして示す。

		(go) mufon	ama ni naru	∫ama uo cayeru	xucqe
巻第一	第2区分	2			
	第3区分	18	2	2	
巻第二	第1区分		6	6	1
	第2区分	10			
	第3区分	6			

（go）mufon を加えて、ama ni naru、∫ama uo cayeru を一緒にしたこの表から得られることを、箇条書きで示す。

1　作表から注目されることは、（go）mufon と ama ni naru（∫ama uo cayeru、xucqe、cami uo ∫oru）の度数差による対立である。

巻第一3区分「鹿谷」事件・巻第二第2区分「高倉宮以仁王」の事件における（go）mufon の度数の大きさが注目される。

「鹿谷」事件は、成親の私憤に起因し、「高倉宮以仁王」の事件は、頼政の私憤に起因し、（go）mufon の出現度数が高い。「鹿谷」事件の私憤の原因は、成親が望む官位を得られないことに不満を持ち、平家に対して mofon を企てたものである。一方、「高倉宮以仁王」事件の私憤の原因は、宗盛の“fuxiguina coto uo xerareta”（源頼政の息子仲綱の愛馬を宗盛に強引に奪われ、屈辱的な仕打ちを受ける）に、頼政は mufon を決意した。

このような mufon に代わる ama ni naru 度数の多い“Guiuŏ”章段は、清盛に対する祇王の私憤に起因している。清盛の“fuxiguina coto nomi uo xerarete gozaru”とする権力者清盛の傍若無人の振舞いに抗して、祇王は ama ni naru 決意をし、行動に移した。

三件三様の内実による平家（清盛・宗盛）に対する（go）mufon, ama ni naru である。

2　一見すると、“Guiuŏ”章段が、二大事件（「鹿谷」・「高倉宮以仁王」）の連続性を欠くかに見えるが、“Guiuŏ”章段の ama ni naru は、かえって巻第二のまとまりを形作る作用をなすといえる。

巻第二第1区分“Guiuŏ”章段の ama ni naru は、清盛の“fuxiguina coto”を起因とし、続く第2区分の頼政が「なましいに私にわえ企られず、宮をすすめまいらせ」て企てた（go）mufon は、宗盛の“fuxiguina coto”に起因する。清盛・宗盛親子のなす“fuxiguina coto”の結末を語るのが、巻第二の主題である。

3　巻第二第3区分6例の mufon は、「源頼朝の挙兵」に出現するものである。「高倉宮以仁王」事件に続く第九・第十両章段は、“Guiuŏ”章段に直接連続する章段ではないとして、第3区分の吟味を割愛したが、第1・2・3区分と、連続する特質を注目しておきたい。構成上の連鎖をなす状況をみることができる。

第1区分のkey wordである“fuxiguina coto”は、第2区分でも出現する。宗盛の“fuxiguina coto”である。清盛・宗盛親子の“fuxiguina coto”をなす連鎖が注目される。

さらに第2区分の“年来日ごろもあればこそあったに：三位入道ことし何たる心がついてmufonをばをこされたぞ”は、第3区分にも出現するkey wordである。“年ごろ日ごろもあったに、今年何たる心がついてmufonをば起されたぞ”と呼応している。

巻第二全体で、平家衰亡の前兆を語っていることになる。

4　ama ni naru、∫ama uo cayeruを吟味する。

“Guiuŏ”章段のみでなく、巻第一第3区分に見られる様子を見ておきたい。

○成親の北の方：ama ni nariかの後世をとむらわれた

○俊寛の娘：ama ni natte，奈良の法華寺に行ないすまいて，父母の後世をとむらわれた

○成親の北の方：菩提院とゆう寺え入って，∫ama uo cayete，かたのごとくとむらいなどをして，後世をとむらわれた

これらは、当時の女性が亡くなった人の菩提を弔うために、出家するのが常のことであった姿に同じである。

一方、祇王たちの出家は、次のようである。

○祇王わ二十一でama ni nari

（妹の祇女も）十九で∫ama uo cayete

（母のとぢも）四十五でcami uo ∫otte

○祇王：我らがama ni nattaことを／身を恨み，世を恨みてのことなれば，∫ama uo cayaruもことわりぢゃ／そなたのxucqeに比ぶれば，ことのかずでもない

成親の北の方や俊寛の娘の出家とは異なり、祇王たちの出家は、信仰への意志にもとづいたama ni naru、∫ama uo cayeruである。中世という新しい要素を持った姿と言える。

5　巻第二第1区分“Guiuŏ”章段、第2区分「高倉宮以仁王」の事件および第3区分「頼朝挙兵」は、連鎖による構成から、巻第二全体の主題を明確に示している。

したがって編者不干ハビヤンの配慮による巻第二第一章段“Guiuŏ”章段の位置の必然性が証明されたことになる。

4. おわりに（まとめとして）

これまで述べてきたことの要点を、箇条書きにしてまとめておく。古典平家物語巻第一「祇王」章段は、天草版平家物語では古典平家の位置とは大きく異なり、巻第二第一章段へ移行している。編者不干ハビヤンの意図によるものと考え、その必然性を吟味したものである。

1　天草版平家物語巻第一（12章段よりなる）は、古典平家物語巻第一～巻第三までの内容を取捨選択してとりこみ、構成内容から3区分に分けられる。主要となる第3区分は、第三章段～第十二章段までの10章段からなる。巻第一の大半をしめる10章段は、「鹿谷」事件を主題としてい

る。藤原成親等による平家打倒の策が失敗し、その顚末後日譚を語る。

2　天草版平家物語巻第二（10章段よりなる）は、第一章段を除き他の九章段は、古典平家物語巻第四・巻第五の内容を取捨選択してとりこみ、構成内容から3区分に分けられる。主要区分となる第2区分は、第二章段～第八章段までの7章段からなる。巻第二の大半をしめる7章段は、「高倉宮以仁王」の事件に拘わる章段群である。高倉宮以仁王が、源三位頼政にすすめられて企てた平家打倒の策が失敗し、その顚末等を語る。

3　巻第二第1区分一章段のみの“Guiuŏ”章段は、祇王の清盛に対する私憤（私憤の原因は、清盛の“fuxiguina coto”）から、ama ni naru までを語る。権力者清盛の“fuxiguina coto”から脱するために、信仰の世界へ向った。(ama ni naru)

なお第3区分（第九・第十の2章段）は、「源頼朝の挙兵」を語る。(源頼朝の旗揚げから、終始源氏方に圧倒される平氏を語る)

4　(go) mufon、ama ni naru（∫ama uo cayeru、他）を key word として、主要区分の吟味を、作表をもとにおこなう。

○巻第一第3区分「鹿谷」事件：巻第二第2区分「高倉宮以仁王」の事件には、(go) mufon の度数が高い。「鹿谷」事件は、成親が望む官位を得られないことに不満を持ち（私憤）、平家に対して mufon を企てたものである。一方「高倉宮以仁王」の事件は、宗盛の“fuxiguina coto uo xerareta”が私憤の原因となり、頼政は mufon を決意した。

このような mufon に代わる ama ni naru 度数の高い“Guiuŏ”章段は、祇王に対する清盛の“fuxiguina coto uo xerarete gozaru”が私憤の原因である。権力者清盛の傍若無人の振舞いに抗して、祇王は ama ni naru ことを選んだ。

三件三様の内実による平家（清盛・宗盛）に対する (go) mufon、ama ni naru である。

5　“Guiuŏ”章段の ama ni naru は、巻第二をまとめる作用をしている。

巻第二第1区分“Guiuŏ”章段の ama ni naru は、清盛の“fuxiguina coto”を起因とし、続く第2区分の頼政が「なましいに私にわえ企られず、宮をすすめまいらせ」て企てた gomufon は、宗盛の“fuxiguina coto”に起因する。“fuxiguina coto”の連鎖が、巻第二の最初のまとまりを持つことになる。“Guiuŏ”章段が巻第二第一章段に位置をしめる必然性を見せている。

6　巻第二第3区分6例の mufon は、「源頼朝の挙兵」に出現するものである。ここで第1・2・3区分と、連続する構成上の特質を注目しておきたい。構成上の連鎖をなす状況をみることができる。

第1区分の key word である“fuxiguina coto”（清盛）は、第2区分では宗盛の“fuxiguina coto”として出現する。清盛・宗盛親子の“fuxiguina coto”をなす連鎖表現が効果的である。

さらに第2区分の“年来日ごろもあればこそあったに：(三位入道) ことし何たる心がついて mufon をばをこされたぞ”は、第3区分にも出現する key word である。“年ごろ日ごろもあったに、今年何たる心がついて mufon をば起されたぞ”（頼朝）と呼応している。

“fuxiguina coto”に続く、第二の連鎖も効果的である。

7　ama ni naru、∫ama uo cayeru の出現状況を見ると、次のことが注目される。

○成親の北の方・俊寛の娘が、ama ni naru・ʃama uo cayeru のは、当時の女性が常のこととして、亡くなった人の菩提を弔うために出家するのと同じである。

○祇王たちの出家は、成親の北の方や俊寛の娘の出家とは異なり、祇王たちの信仰への意志にもとづいた ama ni naru、ʃama uo cayeru である。中世という新しい要素を持った姿と言える。

8　巻第二第1区分“Guiuŏ”章段、第2区分「高倉宮以仁王」の事件および第3区分「頼朝の挙兵」事件は、二回にわたる連鎖が効をを奏し、巻第二全体の主題を明確に示している。

“fuxiguina coto”をなす清盛・宗盛親子の行為が、構成上の効果をあげるには“Guiuŏ”章段は、古典平家物語巻第一「祇王」の位置ではなく、大きく移行して巻第二第一章段に位置するのがふさわしい。編者不干ハビヤンの意図による必然性が証明されたことになる。

また第2区分・第3区分で key word となる“年来日ごろもあればこそあったに：三位入道ことし何たる心がついて mufon をばをこされたぞ”の連鎖も効果的な働きをしている。連鎖表現が二度出現することにより、巻第二全体のまとまりを見せることになる。

9　なお“Guiuŏ”章段の、古典平家物語と天草版平家物語間に在る種々の問題については、ここでは触れていない。専ら“Guiuŏ”章段の巻第二第一章段に位置する必然性のみを吟味の対象とした。

10　この論文では、原本の「ɾ」は、すべて「ʃ」とした。

参考図書

麻原美子・春田宣・松尾葦江編（1990）『屋代本高野本対照平家物語』新典社
斯道文庫編（1970）『百二十句本平家物語』汲古書院
島津忠夫・麻生朝道（1982）『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院
水原一（1979）『平家物語上・中・下』新潮日本古典集成　新潮社
梶原正昭・山下宏明（1991・93）『平家物語上・下』新日本古典文学大系　岩波書店
冨倉徳次郎（1949）『平家物語上・中・下』日本古典全書　朝日新聞社
梶原正昭（1984）『平家物語　改訂版』おうふう
江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院
大津雄一・日下力・佐伯真一・桜井陽子編（2010）『平家物語大事典』東京書籍
山田孝雄（1911）『平家物語考』勉誠社
土井忠生（1963）『吉利支丹文献考』三省堂
土井忠生（1934）『近古の国語』（「国語科学講座」31）明治書院
小島幸枝（1994）『キリシタン文献の国語学的研究』武蔵野書院
清瀬良一（1982）『天草版平家物語の基礎的研究』渓水社
鎌田廣夫（1998）『天草本平家物語の語法の研究』おうふう
市井外喜子（2000）『天草版平家物語私考』新典社

（2015年9月29日受理）